

私がわたしでいられる場、それは場所ではなく状況かもしれません。

私をわたしとして認め、認められている。そんな安心感があれば、どんな場所でも、私はわたしでいられます。そんな場をたくさんの人に持ってほしい。

社会という大きな森に住む、いろいろな私がそんな場を持つことができれば、この大きな森は心豊かに暮らせる世界になるのでしょうか。

## 新米ママと自分探し

「こんな生活、私らしくない！」  
そんな想いに強くかられたのは、まだ子どもが乳飲み子の頃だ。

24時間フル稼働。会話が成立しない赤児とのコミュニケーション。社会との断絶感。家庭はストレスに溢れ、およそ私らしくいられる場所とは言い難かった。漠然と「ここではない」

という違和感を感じていた。

かつて「自分探し」のブームがあった。若者は、自分の可能性や受け入れてくれる場を探して、旅に出たり、職を変えた。職もなく、旅にも出られない私は、家庭に残った。

時が経った今、家庭も私らしくいられる場のひとつとなった。では、あの違和感は何だったのか。思い描いていた生活とのギャップ？孤独感？母性の目覚めの遅れ？

当時との違いは、母としての私もまた、私の一部だと認められるようになったこと。子どもを怒鳴ったり、時に一緒に遊んだりする私もまた、「わたしらしい」。私の中の、新たなわたしを発見した感じ。新たな自分を探しあてた。

人は生きていく中で、様々な役割や顔を持つ。「役が人をつくる」と言うが、その役割、役職を全うすることで、あらわになる一面もある。

新米ママの私が当時感じていた違和感は、「母である私」への戸惑いだったのかもしれない。だとすると、「わたしらしくいられる場」を探すのは、実は「新たな自分」を探すこと。「自分探し」は外の世界に飛び出さなくても、取り巻く関係性の中でも、十分見つかる。心の置き場所はきつとある。

誰かが言っていた「人生は自分探しの旅」の言葉にも、うなづける。(二休)



# 特集

# 私がわたしで いられる

## 義父との時間

昭和10年生まれの夫の父は、心臓病を患い、長期間の投薬の副作用で、記憶が短くなるという症状が出始めた。五月に、心臓が肥大し、緊急入院を機に、退院後、しばしば、パニック障害の症状も出るようになったと義母から聞き、義父との会話の時間を毎日持つようにした。



千葉県に住む義父へは、当初、携帯に電話をかけていたが、パソコンを活用し、スカイプという無料ソフトをダウンロードして、パソコンにカメラをつけ、テレビ電話のような使い方ができるようになった。電話代はかからない。義父の部屋と、私たちの居間がパソコンによってつながれ、まるで、同居をしているような感じである。

「わたしらしいって  
どんな

毎週末の土曜日は、千葉の市原へ、夫と二人、電車で日帰りして夫の両親と一緒に夕食を大事にしている。

朝の7時、夫が出勤する直前に、「おはよう。今日も暑いね。散歩は続けてる？」という会話からスタートする。その後、私がパートに出るまで時間を見つけて、義父とおしゃべりをしていたが、ある晩、ふと、思いついて、新聞の読みっこをするようになった。

朝7時15分から、20分、夜9時から、40分ほど、天声人語に始まり、興味のあった記事を選んで、段落ごとに声に出して読む。義父は、声に出して新聞を読むことが、非常に楽しいと、満面の笑顔で、画面の前に座ってくれる。私も、新聞を声に出して読むことは、記事がとてもよく頭に入り、おもしろさを感じている。

義父との共有の時間が、私が私として一日の中で、最も充足した時間である。(藤村ゆかり)

## 嫌われたって明日は来る

自分らしくいられるって、どういことだろう。

私が私らしく、正直に偽らずにいられること。これができたら人間関係は随分すっきりする。だって、自分の気持ちこそその場ではっきり相手に伝えられれば、余計な期待も、妙な詮索もなくなる。自分が下したあいまいな判断で悩まされることも相手を悩ますこともなくなる。ただしこれを実行するには「嫌われてもいい」という覚悟が必要で、たいいていの人とはそれが持てないから、本当に言いたいことは、口当たりがいい言葉で巻いてしまう。

推理小説にハードボイルドという



ジャンルがある。世間の常識や情に負けないタフな探偵がしがらみを見無視して思い切り不愛想に事件を解決していく。お世辞も気遣いもないし、空気なんか読まない。相手の立場なんぞという言葉は探偵の辞書にはなく、たとえ愛した女でも悪いやつはとことん追い詰める。おかげでいつも嫌われて時にはほこぼこにされたりするけれど、嘘で固めた現実よりいと納得している。好きな女に「あした会える？」と聞かれても「そんな先のことはわからない」と答え、愛した女を警察に引き渡しながら「絞首刑になったらときどき思い出してやる」と突き放す。非情だが、そこには探偵の生きざまが正直にある。探偵が実に探偵らしいのだ。

もちろん、殺人もピストルもほとんど縁のない私たちにとって、こんな生き方は、正直いってしんどい。しんどいけれど人間関係の銃撃戦に疲れたら、彼らのようにたまには心情を吐露してみるのもいいかもしれない。もし、それを笑って聞き流してくれる人がいたとしたら、その人の前が私らしくいられる場所なのだろうか。

そして、そんな人がひとりでもいれば「大丈夫、嫌われたって明日は来る」。

(ハードボイルド)

## 自分をまるごと肯定する

『赤毛のアン』で有名なモンゴメリの作品には、炉辺のおばあさんが必ず出てくる。人生のあらゆることを知り尽くした、ひとりもの。魔法使いのようにストーブの上のスープ鍋をかきまぜながら、誰かとおしゃべりをしつつ編み物をする。時には昔話やお伽話をしたり、豆をさやから出しながら相談事につたりする・・・いいなあと思つた。決して出しゃばらず、だからと言って卑屈なところはない。独立していて自由であり、しかも自分の意見を持っていて他の人を認める。家政婦として長いこと働き続け、誰にでも対等に接してきたので、家族がいなくても家族がいるのと同じようになっていく。

彼女はどのようにしてそういうおばあさんになったのだろう。当時の女性の仕事としては家政婦しかなかったと思われるが、物語の中では詳しいことは書かれていない。だが、ひとつだけわかるのはいろんな人たちと付き合っ



私がわたしで  
いられる場はどこに？



居酒屋に生まれた  
「わたしの世界」

あれは1970年代の半ばである。

東中野駅の階段を下りたところに居酒屋があった。ある日、ふらっと仕事帰りに立ち寄り、カウンターで生ビールを飲んだ。それまで、友達や同僚と一緒に飲むことはあっても一人で飲むことはなかった私が、なぜ一人で居酒屋の暖簾をくぐったのか、記憶にない。上京して10年近く、物心両面で少し余裕ができて、「わたしでいられる場」を探していたのかもしれない。

居酒屋に入れ替わり立ち替わり出入りする客は意外に一人客が多い。マスターが、さりげなく隣の客を紹介してくれる。回を重ねると、そこでしか会わない飲み友達が1人、2人と増えて

いく。家に帰る前に一杯やっていくサラリーマンもいれば、ビッグ・バンドのトランペッターもいれば、蕎麦屋の店長もいれば、塾の教師もいれば、有名大学の空手部の学生もいる。実に様々な人と知り合い、つきあいは店の外にも広がっていった。

会社を舞台にした世界以外に新しい世界が生まれたのである。そこには「北さん」と呼ぶ人間しかいない。会社も肩書も職業も年齢も関係なし。ありがちな「上下関係」もない。仕事の衣を脱いだ「私」がいて、その「私」に好意を持ってくれる仲間がいた。なぜだかわからないが、そこにいると生きる力が湧いてきた。その力を借りて、私は会社を辞めて独立した。線路を挟んで反対側のビルに個人事務所を開いた。

その後、親になって、娘が世話になった学童クラブで「おやじの会」という場を持てたのも、小平に来て、「水泳教室」で9人の仲間ができたのも、この居酒屋の体験があったからである。求めれば、どこにも「わたしでいられる場」を見つけることができる。仕事の世界では味わえない楽しさを知り、それを楽しむことができている。もちろん、家庭でも「わたし」でいるが、家族には異論があるようだ。

(北さん)

小平市男女共同参画推進条例の基本理念  
男の人も女の人も、  
みんなかけがいのないひとり

第3条に「男女の個人としての尊厳が重んぜられること、男女が性別による差別的取り扱いを受けないこと、男女が個人としての能力を発揮する機会が確保されること、その他の男女の人権が尊重されること。」そして「社会における制度又は慣行が、性別による固定的な役割分担等の意識を反映して、男女の自らの意思による多様な生き方の選択に影響を及ぼすことのないよう配慮されること。」が定められています。

こうしたことが実現すれば、私がわたしでいられる場を、たくさんの人が持つようになるのですが…。

てきたこと。そうして彼女は、相手を気に入ればスープをすすめ、気に入らなければ最後に「ピシヤリと」自分の意見を言ってきたのだ。

20歳の頃の私は彼女に憧れていた。人生について知っているとほすごいことだと彼女を尊敬していた。その後も見合い話の度に、なぜ彼女のようにひとりものではないかと思ったり。結婚して家庭を持ち40歳を過ぎた頃の私は、人生の半分を生きてきたというだけで自分をまるごと肯定できるようになっていた。炉端のおばあさんは、作者のモンゴメリー自身がなりたくてもなれなかった女性の姿にちがいない。そのことに気がついた私は彼女の年代になつたが、彼女に近づくことができただろうか。

(懐かしの干鰯)



# 『ひらく』の書棚



小平市男女共同参画センター“ひらく”にある本の紹介です。本は借りることができます。

## 『ブレ更年期からの女性ホルモン塾』

対馬ルリ子＋吉川千明・著

〈小学館〉

1,400円＋税



女性ホルモンの減少が原因、と知ってはいる「更年期障害」。でも、症状をはっきり自覚するのは難しく「気のせい」になりがちです。この本は、更年期かもしれない不調を6つのタイプに分け、チェックリストで自分のタイプが分かるようにしています。「粘膜ヨワヨワさん」「心イライラさん」などのネーミングも重くなりがちな気持ちを和らげてくれます。もちろんそれぞれの特徴や対処方法も詳しく教えてくれますよ。

## 『I'm home』

アイムホーム 上下

石坂啓・著

〈小学館〉

1,000円＋税



「ただいま」と家に帰ったとたんの雨に、洗濯物を取り込み手馴れた様子で家事をこなすのは主人公の家路久。ところがこの家はすでに離婚して出て行った家だった。

彼は一酸化炭素中毒の後遺症でここ5年間の記憶を完全に失っている。どうしても思い出せない再婚後の家族と生活する違和感。苦しむ彼は、訪ねる先々でかつての自分の姿に出会うことになる。己の勝手な行動は周囲が記憶してくれているものだ。そんな彼が見つける「居場所」とは？ミステリータッチで引き込んでくれる漫画だ。

## 『ひとりの午後』

上野千鶴子・著

〈NHK出版〉

1,300円＋税



おひとりさまブームの火付け役、社会学者上野千鶴子を知る人は、戸惑うかもしれない。

人生の午後にさしかかった今、著者が感じる、ささやかなよろこびや幸せ、迷いや断念。浮かび上がるしなやかな暮らしや思考は、芳醇で味わい深い。歳を重ね、たおやかに生きるおとなのための、上質なエッセイ集。  
※本書では、著者の心が垣間見れますが、頭の中については、次ページをどうぞ。

## 詩集『くじけないう』

柴田トム・著

〈飛鳥新社〉

1,000円＋税



朝日新聞の天声人語にて、白寿の詩人柴田トムさんを知りました。九十歳から詩を書き、産経新聞の投稿欄「朝の詩」の常連さんです。平成21年10月に自費出版された詩集が、飛鳥新社から再出版され、4万部を記録しています。

この詩集を読み、そがれた言葉の温かい核なるもののみが書かれた詩のすばらしさに、涙がこぼれました。

柴田さんは、十代で奉公に出た経験もあり、現在、一人暮らし20年と書かれています。優しい、温かい言葉に満ちているのは、はかり知れない経験があるゆえなのでしょう。生涯大事にしたい本です。

## 『同潤会 大塚女子アパートメント ハウスが語る』

女性とすまい研究会編

〈トメス出版〉

2,400円＋税



この本は住人たちの回想で始まる。最後の住人が退去した平成14年、東京都は老朽化を理由に建物を解体した。(編者たちは訴訟で対抗したが、敗訴してしまった。)

東京のほとんどの建物が崩壊した関東大震災後、单身女性は家を借りるのが他の人たちより困難だと理由から、外国の資金援助も得て国内初の働く女性のための中庭つき鉄筋コンクリート造集合住宅、大塚女子アパートメントハウスが建てられた。当初は高収入の女性たちの住宅だったが、戦後、管理が都に移ってからは低所得者層の住宅になり、昭和50年には单身女性で50歳以上の入居条件が加わったという。

戦火をくぐりぬけた歴史ある建物が、多くの建築家たちにさえ存在を知られず、充分な修繕もされずに解体され、しかも跡地利用されない現状がとても気になった。これはまさにジェンダーの問題だろう。



現地(平成22年夏撮影)  
東京メトロの懐古趣味ポスターを横目に茗荷谷駅を出た。「都の所有地 立入禁止」の看板脇から覗くと、瓦礫の山が見えた。

# 女と男のフォーラムの報告

## 『おひとりさま』

～ある時はみんなで…ある時はひとりで…～

講師 上野 千鶴子さん  
(東京大学大学院教授)

小平市男女共同参画推進実行委員会が企画・実施している第14回「女と男のフォーラム」は、平成8年にスタートして以来初めて「男女共同参画週間」の6月25日に、上野千鶴子さん(東京大学大学院・人文社会科学系研究科社会学研究室・教授)を招いて行われました。



### ●ひとりで生きる老後

10年前「近代家族」(夫婦、子ども二人、専業主婦)が不自然であり、そのために起こる少子高齢化と、おひとりさまの急増を予想した上野千鶴子さんが、同じ小平市中央公民館で10年後の女と男のフォーラムで、ご自身を含めて、これからどんどん増えていく、ひとりで生きる「老後」について講演された。

上野さんは、介護保険が始まったところからこの「ひとりの老後」を研究課題にしてきたそうで「私は負け犬だから、老後は他人に任せなくてははいけないと思っている」と話す。あのベストセラー『お

ひとりさま』は、わが身ゆえの産物か？自分の身に迫っていることだからこそ、あんなにも斬新でかゆい所に手が届くような、重宝な内容になったのだろう。

●上野節、全開  
ただ、平成19年、上野さんがまだ50代に書いた頃と、現在62歳、いよいよ老後に近づいた今とでは、少し勢いが違ってきているのでは？と、少々意地の悪い興味を持ったのだが、なんのなんの、初めの内こそ、「上野は終わった」と弱気に見えたがこれは彼女流のユーモア。「おひとりさま」の現状、豊かで快適な老後を送るための日本中の施設の話になると、とたんに熱が入って、上野節全開。

著書『おひとりさまの老後』では、老後の過ごし方、友達を持ち方、暇のつぶし方と、かなりメンタルな要素が濃かったが、老後を問近にしての上野さんは、日本中に点在しているコレクティブハウスを数多く訪れ、実際に彼女が足で集め

た、今すぐ役に立つ高齢者施設情報満載の内容になった。

### ●安心して死を迎えたい

民家を借り上げ5人ほどで賄っている施設が県内に43件ある富山のケアネット。県内22カ所の看護ステーションで、介護サービスをカバーしている宮崎県等々。各地で介護問題に新しい仕組みが生まれ始めている。

とはいえ、高齢者問題は年寄りの施設をたくさん造れば良いという考え方は、高齢者の立場を理解していない、個室ケアが増えることが果たして高齢者の幸せにつながるのか。

「この地で安心して死を迎えたい」という、高齢者達共通の願いを最終目的にすることが肝心だと締めくくった。



### ●アンケート集計結果

192名の参加者の約60%にあたる119名の方から回答をいただきました。

Q. 今日の講演テーマ・内容は、いかがでしたか？

1. とてもよかったです。 91名
2. よかったです。 27名
3. あまりよくなかった。 1名
4. よくなかった。 0名

Q. よかったことはなんですか？

・理解しやすく笑いもあり、勉強になった。

・「おひとりさま」は悲しい言葉だと思っていたが、考え方一つで生き方も変わると、考えさせられた。

・家に抵抗勢力があることの問題は、目から鱗だった。

・自分の最期を考える良い機会になった。

・マスコミでは伝えられない、本当の介護のことがわかって良かった。

・先生の本を読み、さらに実際の話を聞いて感動した。

・ひとりになっても勇気を持って、と応援されたよう。

・それぞれみんなが自立すべきだと思った。

などなど。

# ひらく広場

## 原稿をお寄せください

ひらくの記事や表紙の感想、その他なんでもOKです。原稿(500字以内)には〒、住所、氏名(ふりがな、原稿掲載は匿名・イニシャル可)、年齢も書いてください。採用された原稿は文意を変えずに短くする場合があります。

あて先／小平市小川町二丁目1333番地  
小平市次世代育成部青少年男女平等課  
「ひらく広場」係 FAX 042-346-9200  
byodo@city.kodaira.lg.jp



ひらく編集室はあなたにひらいています。

## 心の自転車

二つの車輪は 心を乗せて  
ひた走る

走る  
走る

自転車ごと ころんでも  
また 起きて

走る  
走る どこまでも

行きつくところは どこ  
どこでもいいのよ

上り坂あり OK

下り坂あり OK

止まらないように  
走れることに

ありがたいの  
心を乗せて

ひた走る  
そして

心がひらけたところで  
止まるのよ



(加藤とも子)

## 苦手な家事から解放されて

上の娘が小6、下の娘が小3になった今年4月から、仕事をしています。家事が苦手な私にとって、この11年間は、正直言って、大変でした。2世帯住宅でしたが、夫の両親と同居なので、1日ずつと一緒にいると、最初は疲れました。子どもができる、子育てで目いっぱい、自分のことを考える余裕ありませんでした。上の娘が小学校に入って、ママ友達が増えて、やっと自分を少しづつ取り戻し始め、仕事しようと思ったんです。仕事は短大の講師ですが、今は家事から解放される時間ができたことが何よりの喜びです。私のいない日、子どもは学

校が終わると学童クラブに行ってますので、帰りに迎えに行つて一緒に帰りますが、これがまた経験したことのない喜びになってます。久しぶりに会った学生時代の友達に「なんか、いいことあったの？

明るくなったね」と言われて、「えっ」と思いましたが、隠せないですね。

きつと、私の変化を娘たちは感じつつ

ているはず。いい変化  
が出ればいいな、と

思っています。先輩ママたちは、同じような経験、されてるんじゃないかね。



(カジメン大好き)

## 風のまわりで

5月のある日、私が公園のベンチで休んでいると、隣のベンチに座っていた2人連れが地図を見ながら思案している様子なので声をかけました。そこは吉祥寺駅に近い井の頭公園です。2人は姉妹で目的の駅とは違う方向へ行つてしまいい戻ってきたようでした。私は現在地と目的の駅への行き方を説明しました。

すると、年輩の方が「お礼に」と50円と80円の切手を何枚か差し出されました。「散歩が好きでよく歩くんです。行く先々で親切な方に出会うので、以前コ

レクシオンしていた切手を渡しているのよ」とおっしゃるので、有難く頂戴しました。ゆっくりと歩き始めた2人の周りには新緑の風が吹き抜け、私の心にも心地よい風が通つてゆきました。

私は時々、公民館や児童館で遊び唄や子守唄の指導をしています。たまに涙ぐむ方がいます。「こんなにホツとできたのは初めてです。」とおっしゃるのは、託児室に預けてきた新米ママです。私自身にも経験がありますが、幼い子のいる暮らしは生活のリズムが一定ではなく、日々緊張することも多いため、幼児と離れるチャンスがあると、それだけでホツとしたものでした。

30年前は「子育て支援」のかけ声はありませんでしたが、公民館保育室が作られた時期です。公民館は当時、私がホツとできた場所です。そこでは様々な出会いがあり、私は大人も成長してゆけると実感したのでした。多くの学びたい意欲が台風の様に渦巻いていました。

今考えてみると、公園のベンチで会った方達のように迷い、誰かに助けられ、またゆっくり歩く、そんな繰り返しの中で、心のゆとりが生まれるのかもしれない。(そよ風)



小平在住、在勤の女性を訪ねて、そのいきいきした様子や元気の素を伝えます。

# いきいき レディ25

## 仕事をしている時が 自分の時間



常に沈着冷静。営業所だよりでは「Ayuのオススメ」を書くこともある。

なかやま

中山あゆみさん

二級建築士

ミサワホームインナー橋学園店

### ◆小さい時から住宅チラシが好き

中山さんは小さい頃から住宅チラシを見るのが好きだった。家の中はどうなっているのか、どんな暮らし方ができるのか、と考えるようになり、自分で間取りを描いていた。都内の商社で五年程事務職として働いた後、会社を辞めて専門学校に通い、インテリア・コーディネーターの資格を取ってリフォーム会社に就職した。女性の資格者が多かったにも拘わらず、会社でも建築現場でも女性は少数だったと言う。20代の女性が現場に出ても、ビシッときめることはなかなか難しかったようだ。そこから、実務経験を積んで二級建築士の資格を目指した。

### ◆再就職はチラシから

出産で会社を辞めてから八年間は子育てに専念した。再就職のスタートは、下の

子どもが幼稚園年長になった時、たまたま手にした地元リフォーム会社のパート求人チラシからだった。職場のパソコンもコピー機もすっかり変わっていたので、カルチャーショックを感じたと言う。一年経った頃、パートでの仕事に物足りなさを感じた中山さんは、人材バンクに登録して現在の会社に採用された。

### ◆働きやすい職場とは

現在の職場は、パートの人を含めて女性が多い。育児休業制度のほか時間短縮制度もあり、入社当初は中山さんも利用していた。現在は、半休を利用して学校行事などができるだけ参加している。「自分の考えや思いを気軽に言える職場こそ働きやすい職場だと思います。何よりもコミュニケーションが大切」と語る。中山さんは一年更新の契約社員。更新時には不安な気持ちにならないこともないが、できれば、定年まで働きたいと思っている。

仕事をしている時が自分の時間だと中山さんは言い切る。そして、「公的には乳幼児支援制度は増えてはきたけれど、就学児に対する支援はまだまだ不足しています。特に、学童保育は6年生まであつてほしいと思います。」と話し、「子育ての場面では、どうしても女性が求められるので、男女平等ではありません。」と結んだ。

### 【取材を終えて】

子どもは一人前になるまでに時間がかかる。特に思春期は大人の本気の関わりが大事だ。時間を作るワーク・ライフ・バランスの考え方は悪くはない。が、人によって希望する中身が違うし、周囲の人たちの理解も違う。一人ひとりの意見を受け止める場所が必要だと思った。

## 市民アンケートから

# どういうとき、ほっとしますか？

6月25日に行われた「女と男のフォーラム」の参加者にお願した広報誌『ひらく』アンケートで、「ほっとする時間や場所がありますか？」と質問したところ、86名の方から回答をいただきました。「あります」が78名、「まあまあある」が3名、「ない」「ないに等しい」が5名でした。「どういうとき、ほっとしますか？」という質問には、さまざまなお答えをいただきましたので、紹介します。



- ◆夜遅く帰って、ひとりでいられる時間。
- ◆仕事から帰り、夕食をすませた後、家人が帰るまでの間。
- ◆あさ、家事が終わって、のんびりお茶しながら新聞を読むとき。
- ◆1日を無事終えて、ベッドで好きなテレビを見ているとき。
- ◆個室で寝る前に日記を書くとき。家族と離れて今日そして過去を振り返り、今後の予定や希望を考える静かなひととき。
- ◆一人でウォーキング。
- ◆一人で好き勝手に好き勝手にでき、必要なときに必要な助けを得られる環境が与えられているとき。

- ◆自分のリズムを取り戻せるとき。
- ◆花を育てたり、野菜づくりの手入れをしているとき。
- ◆趣味の登山に行き、天気にも恵まれ、頂上近くについたとき。
- ◆図書館で本を読んでいるとき。
- ◆人とのふれあいが最高。人形劇づくりと保育園まわりをしているとき。
- ◆親友とおしゃべり、買い物、美術館、悩みの相談。
- ◆同じ悩みを持つ人たちの自助グループに行き、自分の抱えている問題や悩みを他の人も持っていることを知ったとき。
- ◆子どもが孫を連れて遊びに来て、食事

- するとき。
- ◆夫や息子と遊んでいるとき。
- ◆家事や育児に追われなくて、ゆっくり休めるとき。
- ◆母が元気で、一人で好きな場所に出かけられるとき。
- ◆20年、勤めながら一人で続けた親の介護も終わり、ゆっくり食事、風呂、トイレができる現在。
- ◆何も考えないとき。
- ◆当たり前のあるとき。
- ◆自分に余裕があるとき。
- ◆無理をした後、それから解放されたとき。
- ◆常時。



# ひらく 掲示板

## インフォメーション

### ファミリー・サポート・センター 提供会員養成講座

春に続き二期目が開講しました。(10月5日~10月26日) 市内在住、20歳以上の方なら誰でも受講できます。内容は、子どもの世話、食事、遊び、健康、発育発達など。一期の遊びの会には様々な年代の意見交換もありました。市報に募集案内が掲載されます。

今年の募集は終わっても来年は是非!

- 電話 042(348)1780 FAX 042(348)1781
- Eメール familysupport kodaira@unchusha.com

## 表紙作品

### 『新楽器 #1. #2. #3』

(素材：銅、真鍮、陶)

制作グループ「Group b」(小平市在住)

Group bは、小平市で育った美大生を中心とする3人が、アート活動を通して小平市を盛り上げよう!と結成したグループです。

自分が自分でいられるときって、どんなときですか?とたずねると、「作品をつくっているとき…作品について考えているとき…作品は“自分エキス”の詰まった混じりけのない自分…作っている自分が好き…」と、創作への意欲あふれる言葉が3人の口から次々に飛び出しました。

今回の撮影は、3人が5年前に卒業した小平第一中学校。新学期を迎えた始業式の日の放課後の教室でした。

作品は、どれもちゃんと音の出る楽器ですが、見たこともないユニークな形と素材感。午後2時半から作品をセッティングして、「放課後のオレンジ色の光」を待ちました。



午後4時半過ぎ。待望の光が、サッカーで砂の巻き上がる校庭に、体育館の屋根の上に、そして教室に射し込んできました。それぞれの楽器から、聞いたことのない音色が聞こえてくるようでした。

(協力：小平市立小平第一中学校)

## DVD

### マルタのやさしい刺繍

(2007年スイス)

監督 ペティナ・オベルリ  
主演 シュテファニー・グラザーほか



夫が亡くなって9ヶ月も経つと言うのに、未だに喪服を脱がず、彼の写真を胸に泣き暮らす、今時珍しく純情なマルタは80歳。なかなか立ち直れない彼女のために、昔からの友達は今色々お節介りを焼き始める。

村の合唱団の団旗のほころびを直すために、数ヶ月ぶりに遠くの街ベルンに出かけ、美しいレースや生地を見た時、マルタの昔の夢がよみがえった。

残りの人生を思い切り楽しく生きようとするお婆さんの話はよく聞かすが、その楽しいことが、いかにも世の中の役に立ちそうな、年寄りにふさわしい、周りの若い人たちが安心してそうなもの(例えば聖書読書会のような)じゃなくて、セクシーなランジェリーショップをひらくって言うのが、何とも好戦的で頼もしい。

もちろん、ショウウインドウに並んだ、繊細な刺繍を施した美しいランジェリーは、古臭いスイスの片田舎では好奇の的。男たちはマルタの行為をほしたないと、一方的に非難する。しかもマルタの息子は牧師。果たしてマルタの夢はかなうのでしょうか。

少しの勇気と夢を諦めない強さがあれば、いくつになっても人生の喜びを手にすることが出来る。絵に描いたようなおばちゃんサクセスストーリーだけど、実現しそうなハッピーエンドが嬉しい映画だ。

## トピック

### 小平市に女性部長



小平市に初めて女性部長が誕生した。広報誌『ひらく』の担当部署でもある次世代育成部部長、鳥越恵子さんがその人。辞令を受けた感想を聞くと、「女性だからって、どうってことないでしょう」と頼もしい返事が返ってきた。

実は、この鳥越さん、『ひらく』の1号から10号までを担当した、私たち「ひらく実行委員」とは同士のような関係なのだ。

市と市民との協働作業を、ぶつかったり、助け合ったりしてするうちにお互いの気持ちが通じ合い、彼女にとって最後の仕事になった「OH! サプライズフェスタ」の頃には、役所仲間から寄付を募ったり、脚立を担いで会場の設営もしたり、もうすっかり私たちサイドの人になっていたことが懐かしく思い出される。

市民の目線で行政を行う公務員の理想的スタンスで、これからの次世代育成部を引っ張ってほしい。『ひらく』での経験がしっかり生かされれば、彼女が今取り組んでいる学童クラブの改革も、きっと理解されるはず。心からエールを送りたい。(ひらく)

行って  
みました

# アーツ千代田3331

平成22年6月、千代田区立練成中学校はアーツ千代田3331(さんさんさんいち)として再スタートした。広報誌『ひらく』の表紙にアートを載せてきたので、アートを身近に感じる新しい民設民営の施設とはどんなところだろうと訪ねた。

## ●区民の要望とアートセンター構想

平成17年練成中学校統合後、地元の人たちも入った検討委員会が芸術やアートの場所として活用するという提言が出されたという。

一方、隣接する秋葉原で10年位前から中村政人さん(東京芸術大学准教授・3331統括ディレクター)は、「秋葉原TV」という創作活動を行いながら、アートセンター構想を具体化できる場所探しをしていた。この2つの流れが一体となって、アーツ千代田3331が出来上がったようだ。大規模改修は区が行い、5年間は合同会社が独立採算で運営する。3331の名称は地元の人たちが古くからお祝い事の時にしてきた「江戸一本締め」の手拍子からとったそうだ。

## ●アートは人と人とのつながりから

正面玄関には、開放感いっぱいの大きなガラスが入ったコミュニティスペースがある。屋上へ伸びるアサガオの緑のカーテンが見えて気持ちが良い。人が集まる場所に必要なものは食べ物だから、ロビーにカフェがあるのがうれしい。地下1階から2階までは教室を利用した展示スペース。常時アートが見学、体験できる。3階はシェアオフィスと会社が入居している。秋からはアートスクールが開校している。2階の一角には区が管理する「地域利用ルーム」があり、町内会が会合に使う。

### アーツ千代田 3331

- ◆場所：〒101-0021 東京都千代田区外神田 6-11-14
- ◆HP：http://www.3331.jp
- ◆電話：03-6803-2441
- ◆FAX：03-6803-2442 ◆E-mail：info@3331.jp



子どもたちが好きな恐竜。明るい場所へ出ていきそう。



カフェの飾りになっている、これもアート。

## ●ご近所の人たちとのおつきあい

帰り道、アーツ千代田3331のご近所の人たちがアサガオの早朝水やりを手伝ってくれるという話を思い出した。小平市には市民の施設として小川東小学校から生まれ変わった小平元気村おがわ東がある。駅から徒歩3分なのに、来場者数は増えない。でも、緑に囲まれた静かな環境は読書、話し合い、思索などにはもってこいの市民空間なのだ。『ひらく』編集室(小平市男女共同参画センター内)がある元気村を活性化するヒントが見えたような気がした。

(写真撮影 鈴木裕子)



小学生と一緒にアサガオの種取りをして、来春また緑のカーテンを作る計画だ。



屋上にはレンタルひと坪菜園があり、地元の人たちも利用している。IDカードで屋上に登って植物に水やりができる。



## ひらくはココにあります。

男女共同参画センター「ひらく」、公民館(11館)、図書館(11館)、地域センター(18館) 福祉会館、総合体育館、児童館、健康センター、市役所 1F2F、東部・西部出張所、郵便局(17か所) 市内各駅(7か所)、八幡駅、萩山駅、東大和市駅

- 小川町 多加楽、手作りクッキーの店歩、商工会館、JA 東京むさし、コーヒーロッジパル
- 小川西町 佐野商店
- 小川東町 ギャラリー青らんぎ、長江宴、フレッドファクトリー 510、カフェ Air
- 上水本町 アトリエ・パンセ
- 津田町 ハタエコンサーン
- 学園西町 ビューティーサロンサンローズ、百の豆木、梁里館、美容室ヘアアグラシユ、鈴木小児科、本間歯科  
ヘアサロンサンライズ、あかね薬局、床屋のけんちゃん
- 学園東町 日本堂文具店、梅の里、アクティブスタジオ、りそな銀行小平支店、グエン・パン・カフェ  
おだまき工房、カシユカシユ、お花粧のしのぎき、きそ歯科クリニック、ふく歯科、復興センター丸新  
ミサワホームインテグラー橋学園店
- 美園町 多摩済生病院、ラグラス、珈琲の香、POEM、永田珈琲、ルネこだいら、小平駅前クリニック
- 御幸町 ケアタウン小平
- 鈴木町 和菓子の玉川屋、きらら ほうず
- 天神町 公立昭和病院、カフェテリアヴェルデ、ヘアサロンひろ
- 大沼町 ガスミュージアム
- 花小金井 上原薬局、風のシンフォニー、辰砂

## 編集後記

巻頁、蛇、蝶の口吻、植物のつる、水流、海潮、台風の目、銀河系…共通点は何でしょう。正解は渦巻き。自然界は渦巻きの意匠に溢れている。そして、原稿を書く時の私の頭の中も、渦を巻いて、ぐるぐるぐるぐる…。(S)

「あなただからできる仕事なのよ。誰かに振ったりしやいないわ。後で冷たいものでも用意するから。」とお願いしている相手は、私の中殿筋。歩くとき横揺れを防いでくれる要なんだけどなあ…。頑張っておくれ。(S)

「CO」(第26号)を駅で見つけ、初めて読みました。薄い冊子なのに魅力的だなと、感じました。市報で募集を知り、27号から編集に携わることになりました。感動はミラクル!新しい扉が開きます。(Y)